

チェコ歴史学の新しい胎動

篠原 琢

1990年の9月26日から2年半、プラハに留学する機会を得た。最初の半年、私はことばの能力の所為もあって、当地の歴史学の潮流に触れることもなく、ただ閑々と図書館で本を繰っていた。研究計画らしきものを携えて指導教官のところを訪ねても、自分の意図をなんだかわからてもれているんだか、どうだか、大層不安だった覚えがある。それで、プラハで知り合った風来坊の中川君や、コンスタンスと楽しく暮らしていた。

翌年の3月、ドイツからユルゲン・コッカがやってきて、「最近のドイツ連邦共和国における歴史学の新しい展開」という講演をした。カレル大学（プラハの大学は「中欧最古の大学」として、その創立者神聖ローマ帝国皇帝のカールあるいはカレル四世にちなんでこういう名前を持っているけれど、実のところ現在のチェコ系大学が生まれたのは1882年のことである）ではしばしばドイツ語で講演が行われる。もしドイツ語圏からチェコ語を解するボヘミア研究者が交流にやってくるときには、かなたはドイツ語、こなたはチェコ語を用いる。つまりそれらは二つの「邦の言葉 Landessprache」なのだから。19世紀のある時期までのボヘミア領邦議会の討議もこんなものだったんだな、と思う。さて、コッカの講演は、構造史的社會史から日常史への展開を、日常史を批判する自分の立場は抑えてごく要領よくまとめたものだった。ただ、プラハの聴衆に日常史の問題がじめに受けとめられたのか、そのときの私は当地の研究者との交際がほとんどなかったこともあってたいへんに悪い印象を持った。「女性史」に話が及んだとき、聴衆がどよめき、あまつさえ所々で秘めやかな失笑、嘲笑が湧いたことがそれに追い打ちをかけた。オンナの歴史だってさ、とあちこちでひそひそしゃべっている。ここで学ぶべきことは、なあにもないっ、と、私は非道く暗い気分になった（ついでに言えば、チェコの研究者の「女性史」観に限っていえば、この印象は今も変わらない）。それからしばらくして、プラハの都市改造（19世紀末にはプラハでもいわゆる「衛生化措置、Sanierung、asanace」が大々的に行われて旧市街のユダヤ人地区が破壊された）をテーマに、シカゴ大学から乗り込んできていたケイト・Gに会った。前から知己だったワンダ姫さん（この人はイェール大学の美術史で19世紀ボヘミアの「温泉建築」を博士論文の論題にしている）と三人で、チェコの歴史学が、あるいはプラハ社会がいかに保守的で、停滞的か、一夜さんざん痛罵したことがあ

った。そこには受け入れられないいらだちもあっただろう、チェコの研究者たちとなかなか有機的な接点を持てないもどかしさないし落胆もあっただろう、ただその時にはそれを意識せずに、ただひたすら痛快だった覚えがある。

チェコの歴史学が問題にしていることがある、日本の歴史学の関心の方向がある、「西側」の新しい歴史学の潮流がある、そして自分が新しく創りたいとまがりなりにも思うことがある。それらを切り結ばせるところに私がいて、私はそれぞれの場所で自分の位置を見きわめたいと思う。大袈裟に言えば、外国史を勉強しようとするときには、そういう多くの軸のあいだの緊張がことに厳しいように思える。そのことを意識するようになるのは、滞在がそろそろ二年目に入って、指導教官のオット・ウルバン氏との話し合いも密になり、当地の同世代を含めた様々の研究者との交際が始まってからのことだった。

たしかに1968年のソ連・ワルシャワ機構軍の侵攻とそれに続くいわゆる「正常化体制」のなかで、チェコスロヴァキア、とりわけチェコの歴史学は絶望的な窒息状態のなかにあった。同じ東側でもポーランドやハンガリーで、西側の研究動向がかなり知られ、歴史学もそれなりの理論的展開を示したのとは状況は本質的に異なっていた。ちなみにいえば、チェコの研究者たちはいまも西側の文献をポーランド語の翻訳に求めることがある。一つは言葉の問題、一つは本の値段の問題だが、それだけポーランドに蓄積があるということだろう。しかしチェコでも、歴史学そのものよりも、美術史や文学史、音楽史といった分野で1980年前後から新しい動向が現われはじめていた。1982年に出版されたオット・ウルバンの大著『チェコ社会、1848年から1918年』やヤン・ハヴラーネクの諸論文が、講壇歴史学ではほとんど黙殺されたのに対して、それらの周辺諸領域で熱く迎えられたこともその事情をよく物語っている。他方、研究・教育機関から完全に排除された主として現代史の研究者たちも、このころから地下で活発な活動を開始していた。水利局の労働者として働いていたヤン・クシェンを主幹とした『歴史学研究Historické studie』は、わずかな部数がタイプライターで打たれて、デシメント系の歴史研究者たちの間に回覧され、1989年までに23号を数えた。そこには驚くほど地味な実証研究も掲載され、その綱領通り、過度の政治性を排して、自立的な歴史研究への強烈な意志が示されている。現在のチェコの論壇をにぎわせているドイツあるいはドイツ人問題への視角、論点はほとんどこの間の議論に萌芽がみられるのである。

1980年代以降の議論を太く貫くテーマの一つにいわゆる「チェコ史の意味」論争がある。これについては別に機会を改めて詳論したいと思っている。「チェコ史の意味」論争の淵

源は、1898年に出版されたT. マサリクの『チェコ問題』とそれに続く『現在のわれわれの危機』に始まる論争にある。簡単に言ってしまえば、マサリクはチェコ国民史に宗教的で普遍的な理念の発現を見ていた。チェコ国民は、ある理念の担い手として一貫して独自なものなのである。1848年に公刊されたF. バラツキーの『チェコ国民史』にその直接の生みの親をみることができるが、そこではチェコ国民史は、スラブ的自由、民主性と、ゲルマン的軍事性、封建性との葛藤として構想されていた。マサリクに論争を挑んだのが、歴史学者のJ. ベカシであった。ベカシは、チェコ国民史をヨーロッパ的文脈のなかにおいて、さまざまな要素の相互作用のなかで形作られたものとして、なんらかの独自の理念を国民史に見いだすことを拒否した。彼にあっては、国民史を発見した「民族復興期」の知的當為も、まさにそれが「暗黒時代」として排撃したバロック文化のなかに、本質的な準備期間があるのだった。「チェコ史の意味」論争そのものは、さらに多面的な相をはらみつつ、さまざまの人物が登場して、1910年代まで続く。そして「チェコ史の意味とは何か」、さらに「そもそもチェコ史に意味があるのか」、あるとしても「それはヨーロッパ文化のなかで否定的な意味をもったのか、肯定的な意味を持ったのか」といった痛ましいばかりの議論が、危機の時代には必ず繰り返された。そして現在がその最後の局面にあたっている。これはいわば、チェコ歴史学のトラウマといってもいいかもしれない。

「正常化時代」の知的停滞、社会的閉塞感が、地下の知識人に道徳的頽廃の危機意識を抱かせたのは不思議ではないし、そこでまた伝統的な「チェコ史の意味」への問い合わせが行われたのもまた不思議ではない。こうした現状認識にさらに第二次大戦後のドイツ系住民の暴力的追放の政治的・道徳的告発が加わった。新たな「チェコ史の意味」論争が、ドイツないしドイツ人問題と密接に関連して論ぜられたのも必然のことだった。この論争のなかでは、グロテスク、マゾヒスティックなまでの自己否定的な国民史観が現れた。1970年代ながら断続的に書きつがれ、発表されてきたボヂヴェン（共同執筆者、ペトル・ピトハルト、ミラン・オターハル、ペトル・プシホダの筆名）の論考は、1991年に『近代史におけるチェコ人』として公刊されたが、それはその極端な例を示している。先に述べたように、デシメント系の歴史研究者の論考には歴史研究として評価できるものも少なくないが（この問題に関して言えば、ヤン・クシェンの『争いの中の共生、チェコ人とドイツ人』を真っ先にあげなければならない）、他方で問題の過剰な倫理化の傾向は否定できない。ボヂヴェンの姿勢ははっきりしている。チェコ国民社会の創成は、狭量な国民的利害の主張によって、中央ヨーロッパの多様で豊かな文化的可能性を内側から絞め殺

してしまった、というのである。19世紀のチェコの政治的、文化的行為者たちは、こうした視点から厳しく弾劾される。つまり「チェコ史の意味」は、ここではただ負の相にしかないものである。

ボデヴェンの本は、多大な反響を呼んだ。そのあまりにも激しい筆致が多くの人々の嫌悪すら買ったのは自然なことだったし、実証、事実解釈に疑問がありすぎた。しかし、それは「チェコ史の意味」論争のさいはてに起こったことだったのである。

先に触れた美術史、文学史、音楽史などと歴史学の共同作業は、国民美術館の研究員が中心になって1982年にはじまつたいわゆる「ブルゼン・シンポジウム」に結集していた。ここでの成果はおそらく、今後のチェコの歴史学に方向性を与えると同時に、「チェコ史の意味」論争をあらたな地平にもたらす、ないしはこれを終息させることになるかもしれない。すなわち、自己主張と自己否定のあいだを揺れた「チェコ史の意味」論争を、19世紀の「チェコ国民社会」形成の直接の申し子として相対化することがそれである。「小国民」という自己意識、ヨーロッパに自らの場所が用意されているか、という不安、それらはおそらくこの論争の背後にあるチェコ国民のコンプレクスである。いまやそうした国民意識の形成のメカニズムそのものに分析が加えられなければならない。

チェコのどんな小さな町にいっても、必ず「フス通り」という通りがあり、フスやジシュカといった国民史の英雄の像がある。19世紀の60年代から、各地に澎湃として起こってきた運動、フス生誕記念協会、ジシュカ顕彰会、フス像建立委員会、ハヴリーチェクの会、その他その他・・・。宗教異端たるフスの称揚には、まちがいなくカトリック教会は苦い顔をしただろうし、19世紀にはすでにフス派の信者はとるに足らない数であった。いったいに、このエネルギーはどこから湧きだしてきたのだろう。この運動は宗教問題としてではなく、近代の国民社会形成のダイナミズムのなかで考えることができる。いわゆる「民族復興」史観を排撃して、19世紀史を国民社会の形成史としてとらえる第一世代だったヤン・ハヴラーネク、イジー・コジャルカや、オット・ウルバンに続いて、現在では国民社会のシンボルを実証的に分析する人々が現れている。「記念碑学、ボムニコロギエ」という奇妙な言葉を唱えるズデニエク・ホイダ、緻密な中世史研究を足場にしながら19世紀の中世像を検討するペトル・チョルネイ、近代にかたちづくられたチェコの伝説、ステレオ・タイプについて長大な連載論文を発表したイジー・ラク、1891年のプラハ博覧会のモノグラフを発表したミラン・フラヴァチュカなどは、ブルゼン・シンポジウムの常連であった（ただし、ここ一、二年のブルゼン・シンポは、すでにその歴史的役割を終えたように

思われる）。

チェコの若手の研究者のなかには、「西側」のヒストリオグラフィーに対する深刻な飢餓感がある。壁は開かれたが依然として、とりわけ経済的な理由から「西側」の文献に触れるることはむずかしい。けれどもチェコ歴史学のこうした発展方向からすれば、「西側」の研究成果の主体的な吸收の条件は存在するし、早晚新たな成果が現れるだろうし、現れてもいる。オット・ウルバン氏のもとで、さらに友人たちとの交流のなかで、私はようやくこうしたチェコ史学の新たな胎動に触れ、自分のやろうとすることがどこに位置するのか、見極めをつけることもできたような気がする。席を見つけたのは、研究動向のなかだけではない。彼らの飲みかわす、プラハの居酒屋のなかでも。これが、二年半の生活の最大の収穫かもしれないな。